

平成 23 年度主任者部会年次大会 (第 52 回放射線管理研修会) 概要報告 (2)

平成 23 年度年次大会において採択されたアピールを掲載いたします。

平成 23 年度主任者部会年次大会・山形アピール

(社)日本アイソトープ協会 放射線取扱主任者部会

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、放射性物質の環境中への大量放出をもたらした。その全貌は未だ明らかではなく、復旧の見通しも明確ではない。

われわれ放射線取扱主任者及び放射線管理担当者は、それぞれが所属する事業所において、これまで厳重な放射線管理を行ってきたと自負している。しかし、この事故によって広範囲にわたる環境汚染が起きた東日本の事業所においては、事業所内よりも環境中の方が高線量で汚染レベルも高いという、これまでには考えられない事態となり、わが国の環境放射能事情は一変した。このような状況下では、これまでのような放射線安全行政で対応しきれものではないことは明白である。したがって国においては、放射線管理の現場を代表する放射線取扱主任者の意見を尊重し、緊急時の対応や現状に則した合理的な放射線管理が行える体制を構築することを強く要望する。

今回の原発事故に対して、多くの事業所が、自主的にまたは自治体からの要請を受けて、周辺環境の測定を行い、市民からの相談や講演要請に対応するなどの積極的な活動を行った。しかし、主任者部会としてみたとき、さまざまな学協会等が事態収拾に向けた提言を行い具体的な行動を展開しているのに比して、団体としての活動が十分ではなかったと言わざるを得ない。

本来、主任者は自分が所属する事業所のために放射線管理を監督する立場にあり、その分を超えた活動を行うのに困難な面があることは否定できない。しかし、私たち部会員は、主任者資格を有し日常的に放射線管理業務を行っているという意味で、社会から「放射線の専門家」としての役割を期待される立場にあり、さらに、今、協会は公益法人化をその方針とし、部会も社会への貢献をこれまで以上に求められている。原発事故とそれによる広範囲の汚染という国難にわれわれは何をなすべきか？ 部会員諸氏に積極的な参加を呼びかけ、事態の収拾と復興に向け放射能汚染への対策と放射線安全の考え方などを具体的に提言し、今後、部会が進めていくべき行動の指針として銘記し、国民へ情報発信を進めて行かなければならない。

ここにこれらの意を込めて、上杉鷹山公の是「なせば成る」をテーマに掲げた平成 23 年度主任者部会年次大会のアピールとする。

平成 23 年 11 月 2 日